

## 演奏療法の可能性について あるADHD児のピアノ指導を踏まえて

川嶋 ひろ子

### About the Possibility of the Performance Musicotherapy based on piano lessons of a certain ADHD child

KAWASHIMA Hiroko

#### Abstract

The research of musicotherapy in Japan have marked a rapid advance in these last 20 years and the effect has already proven. The content is wide-ranging though musicotherapy is "Music is said the use to accomplish the treatment purpose like the maintenance of mind and body's health, the recovery, and the improvement, etc." (definition of The National Association for Music Therapy).

For the subject is mental treatment needed or is body treatment needed or are both treatments needed? Moreover, what kind of treatment is needed and to what extent is the treatment needed? In addition to the grasp of various elements of music, every branch of knowledge such as medicine, physiology, biology, and psychology is demanded for the judgment. Moreover, musicotherapy is divided roughly into two: the method of expressing music (active) and the method of listening to music (passive), and each method is subdivided variously.

This paper searches for the possibility of the performance musicotherapy based on the report of this researcher who gave the piano lessons to a certain ADHD child who did the music experience practice of two weeks respectively for two years at the music university.

Key Word: Music Therapy, ADHD, Piano Lesson

#### [ 要約 ]

日本における音楽療法の研究はこの20年程の間に急速に進み、またその効果も実証されて来ている。音楽療法とは「心身の健康の維持、回復、増進などといった治療目的を遂行するために音楽をもちいることをいう。」(全米音楽療法協会における定義)<sup>[引用1]</sup>というものであるが、その内容は実に広範囲にわたるものである。

対象者が、精神的治療を必要としているのか身体的治療を必要としているのか、あるいは双方を必要としているのか。またどのような治療をどの程度必要としているのか。その判断のためには音楽が持つ諸要素の把握のほかに、医学、生理学、生物学、心理学など、多岐にわたる知識が要求される。また、音楽を用いる方法として、音楽を聴く(受動態)方法と音楽を表現する(能動態)方法とに大別され、それぞれの方法もまた様々に細分化される。

本研究では、音楽大学で2年に亘りそれぞれ2週間の音楽体験実習を行ったあるADHD児に対してピアノ指導を行った本研究者の報告に基づき、演奏療法の可能性を探ってみる。

キーワード：音楽療法、ADHD、ピアノ指導

はじめに

イギリスの音楽療法協会を作ったジュリエット・アルヴァン（J. Alvin）女史はパヴロ・カザルスに師事したチェリストであるが、彼女は「音楽療法をやる人間はプロの音楽家でなければならない。とにかく訓練に訓練を重ねて、音楽によって自分自身を本当に深い所まで表現できるようにならなければならない。そして、一人の障害児に向かった時、舞台上立って何千人もの聴き手の前で演奏するのと同じ精神で演奏しなければならない。」と言っている。<sup>[引用2]</sup> これは音楽を物理的な「音」としてではなく、心から心へ届くメッセージとして捉え、この力によって対象者を引きつけ、また引き上げなければならない、という意味ではないだろうか。では具体的にどのような手法があるのか。精神性を高めると言われている音楽を表現するという手段によって、障害を持った人たちの機能改善を図り、音楽に接する喜びが生きる喜びとなるように導くにはどのような手法があるのか。一人のADHD児へのピアノ指導の記録を基に、演奏という手段に重点を置いた音楽療法 演奏療法 の可能性を探ってみる。

## 1. ピアノ演奏指導報告

本研究のきっかけとなったあるADHD児A君の平成16年度および平成17年度におけるそれぞれ2週間の音楽体験実習の中でのピアノ演奏指導の報告。

### 1.1. 概要

#### 1) 実習の目的

平成16年度 A君の音楽能力と学習能力がどの程度であるかを判断する。

平成17年度 前年度の判断に基づき、より高度な音楽教育を行う。

#### 2) 実習生A君について

・学年

養護学校高等部2年生（平成16年度）同3年生（平成17年度）

A君が通う養護学校では学外体験実習を取り入れ、社会活動に参加する機会を与えているとのことである。実習の内容としては職場体験が多いようだが、A君の場合、音楽能力に優れたものがあり、音楽大学での体験実習を行うことになった。

・ ADHD（注意欠陥 / 多動性障害）

[ Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder ]

医学的に ADHD 児とはっきり診断されることはごく少ないそうであるが、A 君は小学生の時点で ADHD 児と診断され、通常学級や特殊学級ではなく養護学校に在籍する位の学習能力と判断されたようである。

普段の様子はじっとしていることが少なく、独り言を言いながらきょろきょろ、ふらふらと絶えず動いていることが多い。また、自分が話したいことや興味を持っていることに神経が集中し、人の話に神経を集中する瞬間が少ないようである。

\* ADHD の定義 <sup>[引用3]</sup>

ADHD とは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び / 又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。

また、7 歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

・ 音楽学習歴

ピアノ

中学生の頃から約 4 ~ 5 年間、音楽教室で週 1 回 30 分の個人指導を受けている。教室では課題曲を決めてそれを練習する時もあるようだが、その時その時で、A 君が弾きたい曲を練習したり、先生が弾くのを A 君が聴いたりというようにあまり堅苦しいものではなく、割と自由な雰囲気ですレッスンを進めているとのことである。自宅ではデジタルピアノで練習をしているが、練習量は 1 日約 30 分程度で、養護学校に設置されているピアノをよく弾いている模様。

コードネーム

中学生の頃から、一人で本を見ながら覚えたいらしい。複雑なコードも理解しているようだ。

クラシック音楽の知識

A 君の父親がよくクラシック音楽の CD を聴いており、曲名や作曲者などについて、父親と一緒に聴きながら憶えたようだ。また音楽への興味が強く、いろいろな音楽知識や雑学的知識がいつの間にか豊富になっている。普段外出は一人でしており、書店などにも出かけて本などを自分で買っている。

1.2. ピアノレッスンの内容と指導上のポイント

ピアノレッスンでの具体的な内容と、指導上で特に留意した点や注意点をまとめてみた。

平成 16 年度

1) 第 1 回レッスン

初対面で A 君は少し興奮気味で、入室するなり「イヤ～、川嶋先生 始めまして。こんにちは！」と握手をしてきたので少々驚かされた。なかなかダンディーで人と接することに慣れているようである。グランドピアノを間近で見るのは珍しいのか、「うわー、すごい！」

と嬉しそうに眺めたりさわったり、素直に感情を出しているが、彼の意識の中にこちらが入って行けるのか、やや不安を感じた。

A君の特徴として

- 1) 普段は落ち着きがなく、絶えず体が動きキョロキョロしている。
- 2) 発音がはっきりしない為に言葉が聞き取りにくい。
- 3) 自分の頭の中で考えていることを口に出しているのか、独り言が多い。

という点がすぐに見て取れた。

まずA君が持って来ている楽譜を見せてもらう。音楽教室で編集している楽譜で、進度別に有名なピアノ曲が収められ、4冊ほどに分かれている。「今日はどの曲を弾きますか？」と質問をすると楽譜を次々にめくり、「この曲は面白い、この曲はちょっと難しい、これは好き...。」と説明してくれる。人に説明していると言うより、自分で言いながら納得しているようにも見える。一通り説明が終わった所を見計らい、楽譜をピアノに乗せながら「さあ、弾いてみましょう。」と促す。

A君がピアノに向かって座った途端、「ペダルが3つもある。」とペダルに興味集中する。「どの曲から弾きましょうか。」と聞いてもほとんど耳に入っていない様子である。ペダルをいろいろ踏んでみたり、鍵盤を押さえながらペダルを踏んでみたり、完全に意識がペダルに集中してしまっている。この状態でピアノを演奏することに意識を向けさせるのはまず無理である。そこで、こちらからA君の意識の対象に近づいてみた。右のペダルの効果はすでに知っているようであった。グランドピアノでは左のペダルを踏むと鍵盤が少し横に動き、ハンマーが当たる弦の数が減ることを説明すると、左ペダルを踏みながらしきりにピアノの中の弦を覗いていた。また「真ん中のペダルはね、鍵盤を打ったすぐ後に踏むと、その音だけが長く響き、ペダルを踏んだまま別の音を鳴らしてもペダルに混ざらないの。」と説明をすると、A君はすぐに真ん中のペダルを試した。本研究者は、今まで学生たちに何度か同じ説明をしたことがあるが、こちらが実際に真ん中のペダルを使って音を出し、実際に演奏して見せた後で自分も試した人はいたが、いきなり自分で音を出しながら試したのはA君が初めてであった。それだけA君の興味が強かったのか、あるいは他の学生に比べ、先生の前だからという遠慮や気恥ずかしさが少なく、興味がすぐに行動に結びついたのかもしれない。真ん中のペダルを使った時の響き方の効果を注意深く聴きながら弾いている。音の響きに対する感覚が鋭いようだ。

[ポイント]

本人の興味や神経が向いている方向を無視して、強引にこちらの指示に従わせようとしても難しい。本人との距離を縮める為にもまず興味を共有することが大切である。

ペダルへの興味が一段落着いた所を見計らい、「1番好きな曲を弾いてみて下さい。」と促す。ペダルへの自分の好奇心をある程度満たしたためか、今度はこちらのお話を聞く余裕が出たよ

うだ。“エリーゼのために”(ベートーヴェン)を最後まで弾いたが、弾ける箇所は速く、難しい箇所は遅くなってしまふ。手の形や打鍵の仕方などいろいろと問題点はあるが、とにかく一生懸命、熱中して弾いている。弾き終わると、「これも弾ける。」と“月光ソナタ”(ベートーヴェン)第1楽章を最後まで、第2楽章を途中まで、第3楽章も途中まで弾き、次は“悲愴ソナタ”(ベートーヴェン)第1楽章の冒頭部分、第2楽章という風に、次々と楽譜をめくりながら弾き続ける。その合間に「ここの所は巧く弾けるときれいだけど、難しい。」とか「ここは速く弾けない。」など独り言のように話しながら弾いている。A君は読譜力がある程度身に付けている。また、こういう風に演奏したいというイメージを自分で掴む力もある。しかし、いろいろな曲の好きな部分だけを次々と“ただ弾いている”弾き方は、普段の行動において常に体が動き、キョロキョロしている様子と合い通じるものがあると思われる。音楽に関する知識はなかなか豊富で、モーツァルトの性格や一生、ベートーヴェンの主な作品について等、次々に話してくれる。ちょっとした音大生よりも音楽史や作曲家の伝記をよく読んでいると思われる。“本当に音楽が好き”ということがA君の様子から伝わってくる。ピアノを弾くことの楽しさを、“いろいろなメロディーをピアノで音にする”楽しさと捉えているようなので、“演奏の仕方ですべての表現が出来る”楽しみを知ってもらおうと、少し突っ込んだ要求を出してみた。

[ポイント]

本人の好きなように弾かせることにより本人の読譜力、弾き方、演奏に対する認識などをある程度把握することが出来る。

“悲愴ソナタ”(ベートーヴェン)第2楽章を使い、音の響きに対する感覚の鋭さを、無意識なものから意識的なものへと伸ばすことを試みた。まず始めに音楽の流れの中での強弱の変化による表現を要求。今までの“ただ弾いている”弾き方が、少し慎重に、意識的になった。こちらのペースに乗ってくれたので、次に声部による音量のバランスを要求してみた。メロディーラインを1番出し、次にバス、そして中間声部で静かにハーモニーを作るということを実際にゆっくり演奏しながら説明すると、大変慎重に、しかし確実に声部間の音量のバランスを作り始めた。無造作に動かしていた指も、意識的に動き出した。打鍵の仕方や弾き方で響きが随分変わることが体得したようだった。また強弱による表情がつくと、強弱という物理的なものだけではなく、流れ自体がより音楽的になって来ている。A君の音楽性は、お父さんが聴くクラシック音楽を小さい頃から日常的に聴いていたことが大きく関係していると思われる。

[ポイント]

響きに対する感覚の程度を測る。また、指先への神経をどの程度集中させ、コントロールできるかを観る。

ここでレッスン時間終了になったが、A君はこの日の感想に「ピアノレッスンをしました。がんばりました。コツをおしえてもらってよかったです。」と書いている。ただ単にピアノ

で音を並べるだけではなく、響きを作り、音楽的に表現する喜びを少し味わってくれたようだ。

## 2) 第2回レッスン

今回は第1回レッスンに比べ比較的スムーズにピアノの前に座り、こちらの指示に耳を傾けている。前回のレッスンで教えた「声部による音量バランス」を“月光ソナタ”（ベートーヴェン）第1楽章で応用することを試みた。A君はメロディーラインを深いタッチで出し、音楽的流れを感じながら演奏している。途中で何度か音を間違えたので指摘すると「このコードはC#m7なんだ。C#の音をDで弾くとE#m<sup>5</sup>dimになってしまう。」と独り言のように言っている。これはハーモニーをコードで把握していることを示している。かなり複雑なコードも理解しているようだ。「ではこの所のコードは何ですか？」と質問すると自分で和音を押さえながら次々とコードネームで答えていく。次第にコードに神経が集中し、自分であちらこちらを和音で押さえながらコードネームを独り言のように言い続ける。「鉛筆でコードネームを書いてみてください。」と指示すると楽譜に記入し始め、結局1楽章全部にコードネームを書き込むまで作業が集中的に行われた。途中までで止めようとしたが、こちらの話は耳に入らない様子である。

### [ポイント]

小さな声での独り言を注意深く聞く。頭の中で何を考え、どのように理解しているかを捉え、その理解力を伸ばす指導方法をすばやく考える。

コードネームの記入が終わったところで10小節程度をサンバのリズムで弾かせてみた。ジャズやポップスにも興味があるようで、いろいろなリズムも知っているらしい。それらのリズムで即興的に演奏するなど、応用力もかなりあることが判った。

### [ポイント]

本人に潜在している音楽知識や音楽能力を探るためには、本人が興味を示した内容をさらに発展させて追及していくとスムーズに観ることが出来る。興味が集中している時に、全く違った方向の内容に無理に向かせるのは難しい。

A君は平成16年度の2週間の音楽体験実習の締めくくりとして、“月光ソナタ”（ベートーヴェン）第1楽章をサキソフォンとのアンサンブルで演奏し、録画した。アレンジはもちろんA君自身である。実に生き活きと楽しそうに演奏している様子が印象深かった。アンサンブルをするには人との協調性、コミュニケーションが必要である。演奏を通してこのような力を自然に身に付けることが出来れば、ADHDの改善にも効果があるのではないだろうか。

ピアノレッスン以外には打楽器、ヴァイオリン、ドラムス、ガムラン、三味線などを体験し、スタジオでの録画風景見学、合奏見学、DVDによる音楽鑑賞、パソコンによる楽譜作成、楽譜閲覧と充実した2週間を過ごしたようである。

## 平成 17 年度

平成 16 年度の 2 回のレッスンの様子から、A 君が持っている音楽知識や音楽能力が幅広く、かなり高度なことが判った。

- ・読譜力、音感（絶対音感を持っていると思われる）、リズム感などのソルフェージュ能力を持っている。
- ・音楽史的知識が豊富。
- ・複雑なコードネームを理解している。
- ・ジャズやポップスの感覚も持ち合わせている。
- ・即興演奏などの応用力もある程度身に着けている。

これらの事を踏まえた上で、今年度はピアノレッスン以外にも聴音、移調奏、和声、音楽史、ジャズピアノなどのレッスンも増やし、A 君の音楽知識と音楽能力をさらに引き上げることが試みられた。ピアノレッスンにおいても、更に高度な要求を出して演奏能力を高めると共に、演奏することによって ADHD の改善に少しでも寄与出来るか、可能性を探ってみた。

### 1) 第 1 回レッスン

今回は事前に、A 君が今までに演奏した経験のあるピアノ曲を知らせて頂き、課題とレッスン内容をあらかじめ検討してみた。第 1 回レッスンでは彼が以前に弾いた“トルコ行進曲”（モーツァルト）と“月の光”（ドビュッシー）を用い、少し趣向を変えてレクチャー・ビデオを見せてみた。まずパウル・バドゥラ-スコダ Paul Badura-Skoda によるモーツァルトソナタのレクチャーを鑑賞。特に楽器の発達と演奏との関係を、途中で何度かビデオを止めながらピアノで説明した。“トルコ行進曲”に出てくる装飾音符が、当時はピアノに装備された打楽器で演奏されているのを観ると、A 君は早速ピアノで演奏し、打楽器の響きに近づくようにいろいろと弾き方を工夫していた。

#### [ポイント]

鍵盤音楽史的な知識もピアノを弾く上で必要であるということ、本人が興味を持ちやすい内容から入っていく。また、興味を持ったらすぐにピアノを弾きながら確認をする。

次にブルーノ・リグット Bruno Rigutto による“月の光”のレクチャービデオを鑑賞。先ほどのモーツァルトでもそうであったが、A 君は楽譜を見ながらレクチャーを聞いている。“月の光”では机の上で、まるでピアノを弾いているように手を柔らかく動かしながら聴いている。時々メロディーを口ずさんだり、独り言を言いながら見入っている。同じビデオに録画されていた、かなり高度なテクニックを要する“前奏曲集第 2 巻より 花火”を見せてみた。A 君は食い入るように見ながら「ウワー すごい。おもしろい！」と目を輝かせている。この曲の楽譜は持って来てはいなかったが、冒頭部分の弾き方を教えてみることにした。

ドビュッシー “前奏曲集第2巻より 花火” 冒頭部分

XII  
Modérément animé  
*léger, égal et lointain*

*una corda*

*marqué*

*pp*

*marqué*

楽譜を持っていなかったが、始めの2小節はピアノの鍵盤で音を教え、A君はすぐに憶えた。初めは少し団子状態の弾き方であったが、両手手首の角度や手首のローリングなどコツを教えると、随分スムーズに弾けるようになった。A君はこの後しばらく何か独り言を言い始めた。よく聞いてみると、コードネームを言ったり音程を口ずさんだりしている。ビデオで観た冒頭部分を思い出しているようである。そしてゆっくり3小節目以降の高音域のオクターブと7, 8小節目の和音や低音域の音を探り始めた。そして楽譜なしにこれらの音を見



つけ出した。彼がかなり高度な音感を持っていることが証明されたのである。第1回レッスンはここで終了した。A君の測り知れない能力に驚かされた。

[ポイント]

全てを指導する側から教える、または伝えるのではなく、まず自分で考えさせることも必要。特にA君のように潜在能力を持っている生徒の場合、限度など設けず可能な限り潜在能力を引き出すことを試みる。

## 2) 第2回レッスン

今回は“幻想即興曲”(ショパン)を扱い、主にメカニクスの面での指導を行った。この曲では、1拍の中に右手4打と左手3打の弾き方が使われている。初めA君は左手の第1音が長くなり、3打が均等になっていなかった。ピアノの蓋を閉め、両手で軽く蓋の上を4:3のリズムで叩くよう、他の学生に教えるのと全く同じ方法で教えてみた。A君はすぐに理解し、正確にリズムを打てるようになった。そのリズムで“幻想即興曲”をゆっくり確認しながら弾くように指示すると、大変注意深く、そして正確なリズムで弾くことが出来た。相変わらず独り言はよく言っているが、昨年度のように注意が散漫になったり、何かに夢中になってこちらの話が耳に入らないというような様子は、今年度のレッスンの中ではほとんど見られない。

次に右手のアルペジオ形の上昇に取り組んだ。

A君は親指をくぐらせる時、親指の支えが弱く手首が下がってしまう。その為、親指で弾くたびに重みが入って強くなり、アクセントのようになってしまう。親指の付け根の支えをしっかりとさせ、くぐらせる時も手首が下がらないよう、右手だけを慎重に弾かせてみた。

手の甲の高さが変わらないように、手首、親指、手の甲に神経を集中させながら右手のアルペジオ形を弾いているA君を見ていると、指導者が決して「出来ないだろう」「説明が解らないだろう」という先入観で接してはならないと痛感した。

メロディーと伴奏形のバランス、中間部の歌い方など、他の学生に教える場合とほとんど同じペースでレッスンを進めることが出来た。

[ポイント]

指導者が決して「出来ないだろう」「説明が解らないだろう」という先入観で接してはならない。聞いていないようでも聞いているし、やる気がないように見えても人一倍意欲を持っている。健常者より少し時間がかかっても、説明に少し工夫が必要であるとしても、彼らは理解し、成長することを忘れてはいけない。

## 2. 考察

本研究者は今までに3人の4歳児にピアノ指導をした経験がある。A君を指導して、A君と4歳児との間に共通している点と全く違った特徴とを感じた。

[共通している点]

- ・ 絶えず体が動いている。

- ・なかなか神経を集中できない。
- ・何かに興味が向いていると人の話が耳に入らない。
- ・直接話しかけられているのに聞いていないように見えることが多い。

[ A君の特徴 ]

- ・理解が速い。
- ・興味があることには率先して取り組む。
- ・記憶力があり記憶を積み重ねることが出来る。
- ・集中し始めると、満足するまで長時間集中力を持続することが出来る。

養護学校でのA君は、集中して長時間同じ作業を続けることはほとんどないそうである。好きな音楽に向かう時、何かの力が働いてそれを可能にしていると思われる。

A君は今まで、いろいろな曲の好きな所をピアノで音にしていたようだが、この段階でもすでに1本ずつの指を動かすことによって末梢神経を鍛えていることになっていると思われる。本研究者はさらに1本ずつの指に違った力の入れ方や動かし方、指だけではなく手首や腕などにも同時に神経を使うことを要求し、A君は応えることが出来た。A君の中で今まであまり使っていなかった機能が活性化されたのであれば、ピアノ演奏はADHDを改善するのに非常に有効であると言えるのではないだろうか。

各レッスンでのポイントを見てみると通常の他の学生にレッスンを行ったり、幼児にレッスンをする上での注意点と共通するものも多く見られる。A君のために特に必要とした点にアンダーラインを付けてみた。

[ ポイント ] 1 .

本人の興味や神経が向いている方向を無視して、強引にこちらの指示に従わせようとしても難しい。本人との距離を縮める為にもまず興味を共有することが大切である。

[ ポイント ] 2 .

本人の好きなように弾かせることにより本人の読譜力、弾き方、演奏に対する認識などをある程度把握することが出来る。

[ ポイント ] 3 .

響きに対する感覚の程度を測る。また、指先への神経をどの程度集中させ、コントロールできるかを観る。

[ ポイント ] 4 .

小さな声での独り言を注意深く聞く。頭の中で何を考え、どのように理解しているかを捉え、その理解力を伸ばす指導方法をすばやく考える。

[ ポイント ] 5 .

本人に潜在している音楽知識や音楽能力を探るためには、本人が興味を示した内容をさらに発展させて追及していくとスムーズに観ることが出来る。興味が集中している時に、全く違った方向の内容に無理に向かせるのは難しい。

[ポイント]6.

鍵盤音楽史的な知識もピアノを弾く上で必要であるということ、本人が興味を持ちやすい内容から入っていく。また、興味を持ったらずぐにピアノを弾きながら確認をする。

[ポイント]7.

全てを指導する側から教える、または伝えるのではなく、まず自分で考えさせることも必要。特にA君のように潜在能力を持っている生徒の場合、限度など設けず可能な限り潜在能力を引き出すことを試みる。

[ポイント]8.

指導者が決して「出来ないだろう」「説明が解らないだろう」という先入観で接してはならない。聞いていないようでも聞いているし、やる気がないように見えても人一倍意欲を持っている。健常者より少し時間がかかっても、説明に少し工夫が必要であるとしても、彼らは理解し、成長することを忘れてはいけない。

音楽を演奏するというのは、感受性や美的感覚により表現したいと思うことを、筋肉や神経の働きに加えてさまざまな知識で内容を豊かにし、説得力のあるものにしていくのではないだろうか。ADHD児のA君には感受性や美的感覚があり、音楽的知識も豊富で今後も増えていくことと思われる。只、筋肉と神経へのコントロールがどの程度まで改善されるのか。この点については医学的な検証も必要となってくることと思われるが、2年それぞれ2回ずつのレッスンにおいて確実に成長を見せたA君の実績は、演奏領域での音楽療法の可能性を明らかに物語っていると言える。

## 結び

音楽療法の領域は広範囲に亘り、演奏という手段による療法は音楽療法の中のほんの一部にすぎない。しかし好きな音楽を演奏するという喜びは意欲となり、肉体的あるいは精神的疾患を改善するための手段として大変有効であることは本研究でも明らかであるし、今までも立証されてきている。しかし、更に演奏を主体とした「演奏療法」の研究を進め、教育手法についてもさまざまな障害者を想定したメソッドを作成していくべきであろう。本研究はその手始めでしかないが、ピアノだけではなく、いろいろな楽器においても研究を進めるべきであろう。研究機関である大学が、その専門性を生かして率先して取り組むべき課題ではないだろうか。

### [引用]

1. 遠山文吉、栗林文雄、岩本啓司、宇佐川浩、松井紀和「障害児の音楽療法」『安田専門講座15』財団法人安田生命社会事業団、p.5 1980年7月。
2. W.B.ディビス、K.E.グフェラー、M.H.タウト、栗林文雄訳「音楽療法入門・上(理論と実践)」一麦出版社、p.4 1997年2月。
3. 文部科学省調査研究協力者会議、「今後の特別支援教育のあり方について(最終報告)」、2003年3月。